



てきすとぽい杯

VOL

3

<http://text-poi.net/>

目次

てきすとぼい杯について

[てきすとぼい杯について](#)

[第三回 募集要項](#)

[第三回 審査結果](#)

[入賞作品紹介](#)

《大賞》

[「ピー Part2」](#) [しゃん](#) 獲得☆ 3.722

《入賞》

[「尻尾」](#) [碧](#) 獲得☆ 3.667

[「メリーさんのしっぽと手と手」](#) [犬子蓮木](#) 獲得☆ 3.643

[「散歩」](#) [たきてあまひか](#) 獲得☆ 3.529

〈候補作品〉 ※得票順

[「庚午のジョリーパスタにて」](#) [ひこ・ひこたろう](#) 獲得☆ 3.471

〈伝承文学賞〉

[「松原奇譚」](#) [茶屋](#) 獲得☆ 3.400

[「トカゲの尻尾」](#) [志菜](#) 獲得☆ 3.250

[「さんま」](#) [めぐる](#) 獲得☆ 3.200

〈しっぽが多いで賞〉

[「オザキ」](#) [鳥居三三](#) 獲得☆ 3.176

[「といかけ」](#) [さきは](#) 獲得☆ 3.125

〈時事テーマ賞〉

[「TPP（当然ペニスぽろり）」](#) [工藤伸一@ワサラー団](#) 獲得☆ 3.000

[「真実と動機」](#) [ウツミ](#) 獲得☆ 3.000

[「彼女の揺れるしっぽ」](#) [ぱぴこ](#) 獲得☆ 2.824

〈番外作品〉 ※投稿順

「のらりくらり」 志乃の詩 獲得☆ 3.600 (制限時間後に投稿)

「コグマのしっぽ」 肉まん大王 獲得☆ 3.000 (制限時間後に投稿)

終わりに

終わりに

奥付



「てきすとぽい」とは

URL : <http://text-poi.net/>

Twitter : <http://twitter.com/textpoi>

てきすとぽいは、2012 年 2 月より製作中の、競作・共作サイトです。

無計画書房に集う WEB 作家の有志で開発を進めております。

先日ようやく、投稿・投票・感想・チャットなど最低限の機能が稼働いたしまして、2013 年 1 月より てきすとぽい主催の競作イベント「てきすとぽい杯」を開始いたしました。



「てきすとぽい杯」とは

競うからこそ、生み出されるものがある。

わずか一時間だからこそ、生み出されるものがある。

てきすとぽい杯は、制限時間 1 時間＋推敲 15 分で、お題に沿った小説を競作するイベントです。

競作で作品が集まった後は、☆投票による審査、感想コメント、チャット会での意見交換や交流がセットになった、全体としては約一週間ほどのイベントになります。

第三回てきすとぽい杯

会 場 : <http://text-poi.net/vote/7/>

お 題 : テーマ「しっぽ」

しっぽ、尻尾、尾を題材に、小説を書いてください。

「しっぽ」という言葉は直接使わなくても構いません。

投稿期間 : 2013 年 3 月 16 日 22:30 ~ 同日 23:45

審査期間 : 2013 年 3 月 17 日 0:00 ~ 2013 年 3 月 24 日 24:00

第三回には、15 作品をお寄せいただきました。

また、その内の 6 作品が、てきすとぽい杯初参加の作家さんによるものでした。

【投稿について】

投稿期間：

3月16日（土）22:30 ～ 同日 23:45

制限時間 1 時間の間に、お題に沿った小説を書いて投稿してください。

お題は、開始時間になりましたら、会場やてきすとばい Twitter にて発表いたします。

会場：<http://text-poi.net/vote/7/>

てきすとばい Twitter：<http://twitter.com/textpoi>

お題発表より 1 時間で執筆、その後 15 分で推敲&投稿してください。

締切は同日 23:45 頃になる予定です（お題発表時刻により、若干前後します）。

【審査について】

審査期間：

3月17日（日）0時 ～ 3月24日（日）24時

審査方法は☆5段階評価で、てきすとばいのアカウントをお持ちの方ならどなたでも投票できます。個々の作品に感想ページもございますので、作品を読んで感じたこと、☆投票では表現しきれない評価など、ありましたらなんでも、お気軽にご記入ください。

票の集計方法：

☆評価の平均で、最も多くの☆を獲得した作品を「大賞」、以降3作品前後を「入賞」といたします。

※時間外に投稿された作品、お題を満たしていない作品も、投票や感想は同じように行えます。

ただ、結果発表の際に、集計対象からは外させていただくことをご了承ください。

第三回審査結果

【審査結果】 ※得票順、敬称略

1位 ☆ 3.722

「ピー Part2」 しゃん

<http://text-poi.net/vote/7/1/>

投稿時刻: 2013.03.16 23:01

2位 ☆ 3.667

「尻尾」 碧

<http://text-poi.net/vote/7/6/>

投稿時刻: 2013.03.16 23:30 最終更新: 2013.03.16 23:38

3位 ☆ 3.643

「メリーさんのしっぽと手と手」 犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/7/4/>

投稿時刻: 2013.03.16 23:26

(番外) ☆ 3.600

「のらりくらり」 志乃の詩

<http://text-poi.net/vote/7/13/>

投稿時刻: 2013.03.16 23:56 最終更新: 2013.03.17 00:03

4位 ☆ 3.529

「散歩」 たきてあまひか

<http://text-poi.net/vote/7/5/>

投稿時刻: 2013.03.16 23:28 最終更新: 2013.03.16 23:40

5位 ☆ 3.471

「庚午のジョリーパスタにて」 ひこ・ひこたろう

<http://text-poi.net/vote/7/10/>

投稿時刻: 2013.03.16 23:34 最終更新: 2013.03.17 08:00

6位 ☆ 3.400

「松原奇譚」 茶屋

<http://text-poi.net/vote/7/3/>

投稿時刻: 2013.03.16 23:24

7位 ☆ 3.250

「トカゲの尻尾」 志菜

<http://text-poi.net/vote/7/12/>

投稿時刻: 2013.03.16 23:41

8位 ☆ 3.200

「さんま」 めぐる

<http://text-poi.net/vote/7/2/>

投稿時刻: 2013.03.16 23:12

9位 ☆ 3.176

「オザキ」 鳥居三三

<http://text-poi.net/vote/7/11/>

投稿時刻: 2013.03.16 23:37 最終更新: 2013.03.16 23:38

10位 ☆ 3.125

「といかけ」 さきは

<http://text-poi.net/vote/7/7/>

投稿時刻: 2013.03.16 23:30

11位 ☆ 3.000

「TPP（当然ペニスぽろり）」 工藤伸一@ワサラー団

<http://text-poi.net/vote/7/15/>

投稿時刻: 2013.03.16 23:43 最終更新: 2013.03.17 17:48

(番外) ☆ 3.000

「コグマのしっぽ」 肉まん大王

<http://text-poi.net/vote/7/14/>

投稿時刻: 2013.03.17 00:04 最終更新: 2013.03.17 00:09

12 位 ☆ 3.000

「真実と動機」 ウツミ

<http://text-poi.net/vote/7/8/>

投稿時刻: 2013.03.16 23:30 最終更新: 2013.03.16 23:48

13 位 ☆ 2.941

「彼女の揺れるしっぽ」 ぱびこ

<http://text-poi.net/vote/7/9/>

投稿時刻: 2013.03.16 23:34

※ 獲得☆票の内訳につきましては、てきすとぼい杯の会場にてご確認ください。

会場 : <http://text-poi.net/vote/7/>

《大賞 1 作品》

獲得☆ 3.722

「ピー Part2」

著：しゃん

<http://text-poi.net/vote/7/1/>

タイの土着神でもある妖精ピーは、休暇をとって八百八の神の住むという東の国へ。
そこでピーが出会ったものは……？ 連作形式でありながら、
Part2 単独でも充分以上に読む人を楽しませる高いエンターテインメント性から、
第三回の大賞に輝きました。おめでとうございます！

《入賞 3 作品》

獲得☆ 3.667

「尻尾」

著：碧

<http://text-poi.net/vote/7/6/>

「尻尾が見えるんです」……そう語り始めた男の、人生とは。
そして、男の話が導き出す結末とは。
印象的な書き出しから一気にラストまで、ぐいぐいと読ませる、
勢いと密度のある作品でした。

獲得☆ 3.643

「メリーさんのしっぽと手と手」

著：犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/7/4/>

あたしのマンションで、コーギーのメリーさんを撫でる高校生の彼の、手。
その手とコーギーのしっぽをめぐる、少し大人の雰囲気のある恋愛小説です。
丁寧な心理描写と二人の微妙な駆け引きが、高い評価を獲得しました。

獲得☆ 3.529

「散歩」

著：たきてあまひか

<http://text-poi.net/vote/7/5/>

主人公が最近、毎朝、シロを散歩に連れて行くのは……。和やかな河川敷での散歩と、そこでの短いふれあいを描いた、甘酸っぱい物語。ぜひ主人公と一緒に、爽やかな朝の河川敷の風を感じてください。

《特別賞》

《しっぽが多いで賞》

「オザキ」

著：鳥居三三

<http://text-poi.net/vote/7/11/>

お題の「しっぽ」に、どこまでもこだわって書かれた作品でした。

《伝承文学賞》

「松原奇譚」

著：茶屋

<http://text-poi.net/vote/7/3/>

即興小説で文末に参考文献が付くというのは、非常に珍しいのではないのでしょうか。

《時事テーマ賞》

「TPP（当然ペニスぽろり）」

著：工藤伸一@ワサラー団

<http://text-poi.net/vote/7/15/>

今話題の TPP を独自の視点で拡張・発展させた、個性溢れる作品でした。

――受賞された皆さま、おめでとうございます！
素晴らしい作品をありがとうございました。

（次のページから、作品が始まります。）

《大賞受賞作品》

ピー Part2

しゃん

その国には大勢の神が住まうという。聞いた話によると八百八。鍋や箸にまで宿っているらしい。人々の信仰心が篤いのだろう。妖精のピーは朝食のパンケーキを食べながら、そろそろその東方の国へ出掛けてみようかと考えていた。楽しいことがあると、尻尾が反応する。竹とんぼのようにくるくる回る尻尾を見て、ピーは貯金を全部使いこむにした。

三月中に訪れたのは、四月に水かけ祭りがあるからだ。妖精がいる国では数々の祭りが催されるが、この水かけ祭りがもっとも賑やかで規模が大きい。この時に風邪をひいたり、怪我をして休んでしまうと、土着神としての権威が失墜する。それだけは避けなければならない。権威が失墜すれば信仰心も衰え、妖精が持つ力も半減してしまう。二年前も歯痛で寝込んでいたら、国中が大洪水に見舞われてしまったのだ。ピーは長老に大目玉を食らった。罰として受けた額の「肉」の字は、鏡を見ると痣のように未だにうっすらと残っている。

あの手この手の水面下交渉を行い、ピーは有給休暇を取得した。そして彼方では桜の開花宣言がされた三月の三週目に、LCCを利用して東方の国へと降り立った。

空港を出てまず向かったのは東京だった。さらに具体的に言えば、すり鉢上の地形の底に駅がある渋谷と呼ばれる街である。そこにハチという犬の妖精がいるという。聞くところによると映画にまでなったらしい。妖精界のレジェンドだ。しかもすり鉢の底ににいるというのがいい。妖精はたいてい木の上や、屋根裏に住んでいるものだが、よほど謙虚な性格なのだろう。

けれども、悲しいかな渋谷はタイ族の街とは勝手がちがう。ピーはスクンビットあたりでよく見かける、難しい文字の看板が並ぶ路地で道に迷った。すり鉢の底へ向かえばいいだけなのに、建物や信号が多すぎる。

「すみません。道を教えてください」

ピーは通りすがりのブーツをはいた若い女に声を掛けた。優しそうな感じがして、尻尾がくるくる回る。

「道？ つーか、君かわいいね。名前なんていうの？」

両膝を折り曲げ、若い女はピーの頭をなでた。タイ族では侮辱に当たる行為だが、ぐっと堪えることにする。

「名前はピーです。ハチという妖精に会いに行く途中なんです。駅へ行く道を教えてください」

「ピー？ 背中にきれいな羽があって、お尻にもかわいい尻尾が生えてるのに、大きな声では言えない名前

なの？」

「大きな声で言えますよ。ピーです。ハチがいる場所を教えてください」

「じゃあ、そのピーに入る名前が分かったら教えてあげる。そうだなあ」

女はピーの耳に手を当てて、恥ずかしそうにある言葉をささやいた。あまりの驚きで、ピーの尻尾は逆回転した。

「ち、ちがいます。僕の名前はピーです。ハチのいる場所を知りませんか？」

「あれ、外れちゃった。じゃあ、これかな」

女はまた耳に手を当てた。次の言葉を聞いて、今度はピーが恥ずかしくて気絶しそうになった。

「や、や、やめてください。僕の名前はピーです。どうか、ハチのいるところを教えてください」

「えー。ざんねーん」

女は光沢のある唇を尖らせると、また耳に手を当てた。囁かれるたびにココナッツの匂いがする。ピーはタイ族の村に帰りたくなっていた。

「ど、ど、ど。どうして、そんなことを言うんですか。い、今は昼間ですよ。僕の名前はピーです。ハチに会いに来たんです」

ピーはめまいがしてきた。つつましいタイ族の村では考えられないことが起きている。この人間の女は何なのだろう。この国には八百八の神がいると聞いたのに。

ピーの尻尾は、くるくる回ることをやめていた。いつもお腹をすかせている、寺院の野良犬の尻尾のように垂れていた。

「あー、ちょっと待ちなよー。そっちじゃないしー」

ブーツの女の言葉も耳に入らなかった。ピーは109と書かれたビルの先にある坂道を上っていった。この国には神はいないのだろうか。

じゃあ、僕が神になれば、唯一の神なのだろうか。

神になれば、もう額に「肉」と書かれることもないのだろうか。

坂を上るピーの尻尾が、再び回りはじめる。けれども、それは今までに見たことがない回り方だ。

右に左に回り、後ろに前に激しく動く。ピーの尻尾の先端は、いつの間にか矢じりのように尖っていた。

(次のてきすとぼい杯につづく)

投稿時刻 : 2013.03.16 23:30

最終更新 : 2013.03.16 23:38

獲得☆ 3.667

《入賞作品》

尻尾

碧

尻尾が見えるんです。

知っていますか？ 人間にも実は尻尾があるんです。……いや、猿だったころの名残の尾てい骨とか、そういう意味じゃなくて。本当に、人間には、尻尾があるんです。僕にはそれが『見える』んですよ。

例えば、ほら、向かいの席に座っているあの若いカップル。男の子の方は大型犬のようなふさふさの尻尾を必死に振っているのに、女の子の方と来たら——にこにこしているけれど、尻尾はぴくりとも動きませんよ。ああ、キツネみたいな尻尾ですねえ。

あっちのテーブルは職場の飲み会でしょうかね。お酒を注いでいる若い背広の男性。なにやら必死におべっか使っていますが、馬みたいな尻尾がだらしなく垂れ下がっている。疲れているんでしょうねえ。

本当です。見えるんですよ。僕には。僕には不思議な力があってね。信じられない？ それなら……

ああ、どうして僕が尻尾が見えるようになったのか——それをお話しなければなりませんかね。

お恥ずかしい話ですが、僕の生まれた家は特別に貧乏でした。父親は呑んでくれで、母が朝から晩まで惣菜屋のパートに出て、なんとか食いつないでいた。僕は次男で、5つ年上の兄がいて、中学を卒業するまでは新聞配達のパイトをしていたんですが、卒業と同時にどこかへ消えてしまいましたよ。まあ、兄の失踪とは関係ありません。その1年ほど前の話ですから。

クラスにタケシくんという子がいましたね。まあ、ごくごく普通の中流家庭の、男の子でしたよ。今になって思えば。でも当時の、ものを知らない僕は、彼の姿も、持ち物も、お家も、それはそれは羨ましくてねえ。僕は貧しくて風呂にもめったに入れない、服もあまりなくて洗濯なんて数えるぐらいしかしないから、臭いくさいなんていじめられていて。だから滅多にないことだったんですが、その日、何故だったか、タケシくんがお家に呼んでくれたんですよ。他のクラスメイトの子も何人か、一緒でした。

タケシくんのお家には、最新の型のテレビゲームがありましたね。彼のお家に行きたがるクラスメイトはだいたいそれが目当てですよ。僕はテレビゲームなんて、目にしたのも初めてでしたから、最初はテレビゲームに群がるクラスメイトたちを遠くから眺めているだけでしたが——今思えば、タケシくんは、本当に、いい人でしたよ、そんな僕に、君もやりなよ、と声をかけてくれたんですね。それで、最新のシューティングゲームを初体験したのですが、何しろ、ゲームなんてやったことがありませんからね。すぐに操作法とルールを理解してぐんぐん腕をあげる他のクラスメイトたちに対して、僕なんて、相手にならないわけですよ。楽しみたい彼らの気分を害していることがすぐに判ってしまったんですね。僕はすぐにゲームから離れて、また遠巻きに黙って彼らを眺めていましたよ。

そうしたら、あの子がやってきたんですね。チワワ、というのかな。小さい室内犬ですよ。後から知ったんですが、テレビコマーシャルでブームになった犬だったらしいですね。僕の家にはテレビがなかったので、知らなかったんですけど。

小さい犬は黙って僕の膝元に来ましたね。本当に小さかった。まん丸な黒い目でこちらを見上げて。ふっさふさの毛の尻尾を振りながら。タケシくんの家のリビングはフローリングでしたよ。だから犬が歩

くといほんのかすかにチッチッチと爪のようなものが当たる音がしました。僕の家はぼろぼろの畳でしたからね。犬の爪で多少傷ついてはいるけれどぴかぴかの、タケシくんの家のフローリングが、なんだか急に妬ましくなりましたね。光ってて綺麗なものは、僕を歓迎していませんからね。タケシくんたちのランドセルとか、ゲームのコントローラのボタンとか、フローリングの床とか、犬の潤んだ黒い目とかですよ。唐突に、惨めさというのを感じましてね。僕の目はかすんできましたよ。その時——なんでなんででしょうね。犬が僕の膝元に前足をかけましてね。尻尾を振ったんですよ。僕はいつの間にかだいぶ俯いていたんで、激しく振られた尻尾の毛が頬に当たりましてね。なんだか、無性に腹が立って、思わず、僕の頬を掠めた犬の毛を握って引っ張ってしまいましたよ。

本当に、恥ずかしい話ですよ。動物に八つ当たりなんて。

犬は小さく声をあげたと思うんですが、ゲームで盛り上がってるタケシくんやクラスメイトたちは気付いていませんでしたよ。僕は思わず抜いてしまった犬の毛を握り締めてタケシくんの家を飛び出しましてね。家まで全力疾走しました。

それからです。この能力が身につけてしまったのは。家に帰ったときには始まっていました。

尻尾はその人の本質や本音を表すんです。父が飲んだくれながら、本当はそんな自分に憤っていること。母は父を悪く言わないけど、もう失望していること——僕たちにももううんざりしていること。兄も、辛抱強いフリをしているけど、一刻も早く家を出たいと願っているのがわかってしまったから、1年後に失踪したとき、僕だけは驚かなかった。

学校で、最初に一番ショックを受けたのは、優しいと思っていた担任の先生が、僕の事を本音では疎ましく思っていたのを知ったことですかねえ。まあ、昔の話ですよ。表向きは本当に親切な先生だったので、今となっては、彼女は本当に立派な先生だったなあ、なんて思います。タケシくんとは中学3年まで同じクラスでしたが、ずっと親切ないい人でしたよ。だから逆に本当に犬の件が申し訳なくて後ろめたくて、なんとなく距離を置いたままでしたねえ。中学までは、この能力は僕の心に暗い影を落とすものでしかなかった。

でも、年を取るにつれて、この能力を有効活用しなければ、と前向きに捉えられるようになりましてね。わかるでしょう。それでまあ、今はそれなりに、立ち上げた事業を成功させて、今日に至ります。

ああ、どうしてこんな話を始めたかって……いやだなあ、もうわかっているでしょう？

婚約は、破棄させてくださいね。僕、打算だけの女性と結婚するのは、嫌なんです。

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。

《入賞作品》
メリーさんのしっぽと手と手
犬子蓮木

「この子にはしっぽがないんだよね」

高校生の彼が、てぶくろをした手であたしの犬を撫でている。

彼はいつでも両手にてぶくろをしているのだ。

「ウェルシュ・コーギーだからね、生まれたときに切られちゃうの」

ふーん、と彼は犬を撫でつづける。なでられているあたしの犬、メリーさんは舌をだしてへっへとせがんでいる。

狭いリビング。あたしの安い給料ではこのぐらいのマンションしか買えない。そんなところにまだまだ若い彼がなぜいるのかは謎だけど、いろいろあって、こうなった。

「なんで切っちゃう？」

「もとは牧羊犬で羊にふまれたあぶないからとか言うね。あとはそんなお尻がかわいいという人もいるからかな」

しっぽがないので、ふくらんだおしりが丸見えになる。たしかにそれはコーギーのチャームポイントだろう。

「ちょっとかわいそうだね」

彼がメリーさんを抱き上げてソファに座った。言葉とはちがい、ほがらかに笑っていてかわいい。外だとあまり見せない表情だった。

「必要だからついて生まれたはずなのに」

「必要ないから切られたのかもよ」

彼はちょっとだけ悲しげな目をする。

あたしは彼の隣に座って、メリーさんの頭を撫でた。少なくともメリーさんは、みずからのしっぽがないことを悩んだりはしてないようだった。

「手袋はずしたら？」

そっちのほうで撫でて気持ちがいいだろう。彼も犬も。そんな意図はたしかに彼に伝わったらしい。でも、

「だめだよ」

やっぱり外せないようだ。

「そう」

あたしはそれ以上、食い下がりはしない。

彼はピアニストだった。まだ高校生なので、プロではない。だけど、なんだかすごい海外のコンクールで上位に入ったとかで、将来はもう決まっているというような話。

音楽にみじんも興味がないあたしにはわからないけれど、そんなレベルになると指の怪我を恐れて、常時、てぶくろをしなければいけないんだって。

犬を撫でるときまでそれなんて、楽しいのかなと思うけど、いつも楽しんでいるようなので、まあいंदろう。もしかしたらストレスの塊なのかもしれないけど。

「コーヒー飲む？」

「ありがとう」

あたしは台所にいって、コーヒーをいれる。熱いやつ。このコーヒーを彼の手にとぼしたらどうなるだろう。きつとてぶくろを外すだろう。そうして、もしかして、それだけでひとりのピアニストを普通の人にできちゃうのかな。

湯気のたつコーヒーの入ったカップを両手に持って運ぶ。

「あっ」

あたしはわざとらしく声をだす。

カップをテーブルに置いた。

「何？」

「ミルク切らしてた。大丈夫？」

そんなことで声をださないでよ、と彼は笑った。彼はメリーさんを床におろして、砂糖をたくさんいれて、カップを口にはこんだ。口のまえで、すこし、ふーふーとさます様が年頃の男の子のようでかわいらしい。

メリーさんが彼の隣に座ったあたしの足に絡みついてきた。とうぜん、しっぽはない。

「必要ないからいらないって、ひどいよね」

「そう？」

彼はすこしだけ泣きそうな顔をする。あたしはそれが見たくて、こんな返答をしていた。

「そんなもの誰にだって決められないでしょ」

前にいろいろな話を聞いたことがある。

彼の家は教育に厳しく、友達も選べと教わるらしい。選べだって、選ぶのは彼じゃなくて、その親なのにな。そうやって厳しくしつけてきた結果、優秀な人間として生きることになって、こんなあたしみたいなおんなのところに来到ることになっちゃうのだから人生とはうまく作るくことができないものだ。

メリーさんのしっぽは、そんな屈折させられた彼のこれまでの境遇と重なるところがあるのかもしれない。

そうではなく、ただ落ち込んでいる今日の彼にとってはなんだっていいものだったのかもしれない。

どうにせよ、彼は今日、どうしてもここに来たいと言ったのだ。普段よりとても強く。

「お母さんにばれた」

「そう」

あたしはコーヒーをひとくち飲む。

「もうあんなおんなのところにはいくなって」

つまり、当然のごとく、彼の親にとってあたしの存在はメリーさんのしっぽなのだ。なくてもよくて切り取りたい存在。

「それでどうするの？」

決めるのはあたしではない。

もちろん親でもない。

彼は、あたしの首の後ろに手をまわして、目をつむり、口を近づけようとする。

「待って」

彼は目をあけた。拒否されたのかと目が涙ににじみそうになった。

「そんな手で撫でられてもうれしくないよ」

ねえ、とあたしはメリーさんを撫でる。

彼は躊躇した。それでも……迷いながらてぶくろを外す。なんだか汗ばんで光っているみたい。

「こんな手だったんだね」

彼のすこし大きな手に手を伸ばす。

あたしたちは、はじめてつながった。

<了>

投稿時刻 : 2013.03.16 23:28

最終更新 : 2013.03.16 23:40

獲得☆ 3.529

《入賞作品》

散歩

たきてあまひか

最近、毎朝シロの散歩をするようになった。

「まじめに連れて行っていてえらいわね。まるでシロがうちに来た頃みたいじゃない」

母に褒められて、私は照れ笑いをする。

「じゃ、いってきます」

「気を付けてね」

シロの首輪から鎖を外し、引き紐に繋ぎかえる。シロは散歩がうれしいのか、わあっと前足を持ち上げて私に飛びついてくる。

「ちょっと、もう、おちつきなさい」

毎朝のことなのに、どうしてこんなに嬉しそうなんだろう。母が散歩に連れて行っていたときも、こんなに喜んでいただのかな。跳ねるように私の周りをかけ、尻尾をぱたぱたと振りながら、シロは出発をせかす。

自宅前の通りを道沿いに抜けて、芦刈川の堤防に突き当たり、堤防のサイクリングロードを川下方向に進んだあと、河川敷の広場でシロを少し放す。これがいつもの散歩コースだ。距離的にはそれほど長くないけれど、そのぶん広場でシロと遊ぶ時間をとるようにしている。

「ほらいくよ？とってこーい！」

力任せに黄色いゴムまりを投げると、シロは猟犬みたいに駆け出して、ゴムまりを咥えて戻ってくる。私の前にゴムまりをおくと、「さあ！さあもう一度！」という表情で私を見上げる。なんて楽しそうなんだろう。ものすごい勢いで尻尾を振っていて、まるでヘリコプターみたいだ。このままとってこいを続けたら、シロは飛んでしまうんじゃないかと思った。

「じゃあ、もう一度。っとーってこーい！」

何度かとってこいを繰り返しながら、もうそろそろかなあ、と思っている。

まだかな、と思っている。

「おはよう、畑山さん」

「っ、おはよう、石野くん」

私はあいさつをしながらシロを呼び寄せて、首輪に引き紐をつけた。

「もういいのかい？」

「うん、充分遊ばせたから。はなしておく、うちのシロ、チョコちゃんにちょっかい出すからさあ」

チョコちゃんというのは、今日の前にいる石野くんが飼っている犬のことだ。小さくて、もじゃもじゃで、確か何かの血統書付きと聞いた。石野くんはクラスメイトで、バレー部で、得意科目が数学で、英語は苦手で、そして、毎朝チョコちゃんの散歩でこの河川敷の広場にやってくる。

私はシロがチョコちゃんのほうに近づきすぎないように引き紐を引っ張りながら、少しだけ石野くんと会話をする。シロと来たらチョコちゃんを目の前にして、また尻尾をぐるんぐるんと振っている。

「じゃあ、私行くね。そろそろ朝ご飯の時間だから」

「ああ、じゃあまた学校で」

「またね」

シロが名残惜しそうにチョコちゃんのほうを気にしていたけれど、私はそれを無視してぐいぐいと帰る。

私にしっぽがついていなくて本当に良かった。もしもついていたら、誰が見てもわかるくらいのすごい勢いで、しっぽを振っていたらうから。

投稿時刻 : 2013.03.16 23:34

最終更新 : 2013.03.17 08:00

獲得☆ 3.471

庚午のジョリーパスタにて

ひこ・ひこたろう

買い物のために外出した時のこと。ジョリーパスタの前で店のバイトのイケメンなお兄さんが、自転車に乗った若い女性と、何やら話していた。

「ああ、青春だなあ」と思い眺めていたのも束の間、お兄さんの方は店に戻って行った。

しかし、女性の方は自転車に乗ったまま、そこから動こうとはしない。いや、動かないというのは、正確にいうと間違いである。なぜなら彼女は自転車に跨ったまま、もぞもぞと後ろを振り返ったり、自分の足元を覗きこんだりしていたからだ。それでいて、自転車で走りだそうとはせず、ずーっとそこに立ち止まったままなのである。

僕は普通に歩いていただけ、次第に彼女との距離が縮まっていく。そして、近づくにつれ、どうやら彼女の長いスカートの裾がチェーンに絡みつки、身動きできなくなっていることに気づいた。

これは僕の想像だが、さっきの店員も外で掃除か何かしている時に困っている彼女を見つけ、助け舟を出そうとしたのである。しかし、彼女の方はなぜかそれを断った。そんな想像をしてみると、先ほどの二人のやり取りもしっくりと理解できる。

まあ、イケメン男子の申し出を断るくらいだから、デブ夫さんである僕の出る幕などあるまい。そんなことを思いながら彼女の脇を通り過ぎようとした時、僕は自転車の後ろに貼られた所有者の住所と名前を書いたシールに目を止めたのである。

「広島市西区観音町・星多真子」

「星多」と書いて「せいた」と読む苗字は、ないわけではなかろうが珍しい。だけど、僕はこの名字に聞き覚えがあった。その名前は僕は子供の頃、八月六日が来るたびに祖母から聞かされた名前だったのである。

祖母はあの日、幟町（当時は上流川町）の会社で仕事をして原爆に遭った。しかし、即座に気絶してしまった祖母は、その時のことをあまり覚えてはいない。気がつくと祖母は白島の近くで見知らぬ男性に背負われて逃げる途中だった。祖母は男に声をかけ、いったい何が起こったのか尋ねた。すると、男は「あんたが道に倒れてたから助けたんじゃ」と答えた。祖母は両腕と両足を脱臼した状態で、道端に横たわっていたとのこと。「せいた」と名乗るその男性は街を襲った火事から逃れる途中で祖母を見かけ、柔道の心得があったため脱臼を治した。その上で喝を入れてみたのだが目を覚まさなかったため、一度助けようと思ったこの命を最後まで面倒見よう、と決意し祖母を背負ってここまで走って来たのであった。

祖母は礼を言って星多氏と別れた。そして万が一のことがあった場合に集合場所として指定されていた祇園の事務所まで、逃げ延びた。先に逃げていた同僚たちは、祖母の姿を見て悲鳴を上げた。なぜなら祖母はとっくに焼け死んだものと思われていたからである。詳しく聞いてみると、祖母は爆風で気絶しており、手足もふらついて運びにくかった。そこで避難の足手まといになると判断され、道中置き去りにされたとのことであった。

「ああ、いい所に置いてくれて助かったわ」と楽天的な祖母は負い目を感じる同僚たちに言った。「おかげで生き延びることができたんよ」

子供の頃から何度も何度も聞かされたその話。そして話に最後に祖母はこう付け加えるのであった。

「星多さんという人がいたら、絶対に助けるんよ。おばあちゃんが死んどったら、あんたもおらんのんじゃけん」

☆☆☆

僕は通り過ぎるのをやめ、一步彼女に近づき、「スタンドを立てて、冷静になってみてはどうでしょう」と提案した。

「あ、はい」と彼女が答えたので、ハンドルを持ってスタンドを立てるのを手伝う。

そうしてスカートの裾を引っ張ってみたり、ペダルを回してみたり、チェーンを押してみたり……。

そんな中、彼女が不意に自分の長いしっぽのようなスカートの裾をひょいと引っ張ると、それは簡単にチェーンから外れ、しばし僕の目の前で宙を舞った。さっきまで何度も同じことを繰り返したのに、最後はあっけないほどの幕切れであった。

僕は大したことはしていないし、問題を片付けたのは彼女自身なのだが、それでもお礼のことばだけは散々受け取った。それから間もなくして彼女が立ち去ろうとしたので、僕は思わずその背中に向けてこう言った。

「金行あやめの孫です。祖母がお世話になったかもしれません」

彼女は自転車を止め、こちらを振り返った。そしてにこやかに微笑みながら、「ほし・たまこです」と自分の名前らしきものを告げた。

「すみません、人違いでした」

「えっ？」

ばあちゃん、ひどいよ。自分の命の恩人の名前を間違って覚えるなんて。「星多」は「ほした」だよ。どうせ漢字の印象が強くて、読みをどこかで間違えたんだろう。俺は恥掻いたじゃないか。「ほした・まこ」を「ほし・たまこ」に聞き違えた俺も、ばあちゃんの血を引いてるな。

だけどな、ばあちゃん。そんな星多さんも、もうすぐ俺と同じ名字になる。とても素敵な女性と引きあわせてくれてありがとう。

《伝承文学賞》
松原奇譚
茶屋

その者達には尻尾があったという。

これは大阪府松原市に残る伝説の話である。

伝説といってもそう遠い昔ではない。戦後しばらくたってからのものであるから、まだ生き残っていて実際に見知っているものもあるかも知れない。だが、そのところは曖昧で、やはりそれが現実であったかどうか曖昧である点でやはり伝説たる所以とも言える。

例えば、一里塚耕助という者。

この者、耕助は、とにかく畑を耕すのが好きだった。畑を耕すというのは正確ではない。畑を開くのが好きであった。大和川の河川敷にあってひたすら荒地を耕していた。彼の目的がなんであったのかはよくわからない。何の見返りがあったのかもよく知れてはいない。ただ、ひたすらに新たな畑を開いていった。おそらく彼はそうすることが彼の人生の命題であり、ある種の真理に達するための道であったのであろう。仏道でひたすら禅を組む趣がったのかもしれない。彼はそれに習ってひたすらに畑を耕した。作物を植えるわけでもなく、収穫を楽しむわけでもなく、ひたすらに畑を作っていたのである。

ひたすらに。ひたすらに。

あまりにも熱心すぎて、前の日に開墾した畑のことなど忘れてしまい別の畑を耕したほどである。

ただの阿呆に見えるこの者。

だが、一生懸命出会ったこの者の姿に、村人は同情的であった。

果たして、その後どうなったのかわからない。

ただ、この者の耕した畑は今どうなっているのだろうか。もしかしたら、今も畑として使われており、千に一つ、あなたが口にしたことがあるかも知れない。あるいは耕助の努力は跡形も無く整備され住宅地や堤防に化けてしまったかもしれない。

耕助の残滓は今も残っているのだろうか。

例えばかんど池おぼこという者。

おぼこは化粧上手であったという。菱蔓のかんざしをつけ、オシロイバナで口紅をしたその姿はたいそう美しかったそうである。近隣の若い男は皆その姿にのぼせ上がり、若くなくともおぼこが通るたびに男たちはその姿に見とれずにはおれなかったというほどである。

化粧は魔性で、一種の化である。人間が誕生して長い年月が経ってしまい、女が化粧するのはさも当然となったが、自然界ではそれほど見られない現象である。多くの動物は雄のほうがり立て雌を惹きつけるための美麗をこなす。人間の雌が化粧するのは自然界では奇っ怪と映るかもしれない。

さて、このおぼこ、伝説はそれだけしか知れない。

化粧をして男をたぶらかすには飽きたらず、恋をし、愛を知り、子をこしらえたかもしれない。野暮な想像であろうが、おぼこの素顔を知った若者がそれでもおぼこを愛すると誓い、めでたく結ばれたという物語もあったかもしれない。

そう、物語が必要だ。

例えば、蛇の足や、人の尻尾のように。

最後に三ツ池およしという者の話である。

下高野街道沿いにある籠池の近くに住んでいる、およしという若い娘があった。

およしは美女であった。

白い肌、美しい着物、麗しい唇の色。男を惑わすには十分な器量を持ち合わせたおよしはその界隈の若者にもてはやされるには十分であった。

およしは外を出歩くとき、赤い笠をかぶっていたが、その顔を見たい男たちは「べっぴんの姿を見せておくれ」と囁し立てるのであったが、およしはどうも恥ずかしがり屋な性分があったようで、その姿を聞くとすうっと煙のように姿を消してしまったと言われている。そのせいか、およしは周辺では「幻美人」と呼ばれていた。美人であるだけならば、と言っては失礼かもしれないが、その姿を拝もうとすると消えてしまう。なんとも典雅で、粹な、その噂はおよしの住む村だけではなくその近隣にまで広がっていったという。

あるとき、のことである。

およしは若い男と恋に落ちた。

道明寺の縁日の日、およしは三ツ池の土手に座り、ぼおっと池の水面を眺めていた。

祭の喧騒。

祭の明かり。

そんな賑やかな村の様子に、やや疲れていたのかもしれない。

本来の姿に戻り、ただ、ぼおっと水面を眺めていたのである。

そこへ、一人の若者がやってきた。この若者も喧騒に疲れていたのかもしれない。そして、およしの姿をみとめ、隣りに座った。

しばらく、二人の間に会話はなかった。

若者は何を思ったかかんざしを取り出し、それをおよしに与えた。

およしは驚き、それを拒んだが、若者は笑って、かんざしを押し付けてしまった。およしはなおも拒むので、若者は笑っていった。

「ならば、明日の晩、私と散歩をしてくださいませぬか」

若者の戯れであったかもしれない。だが、美女の姿ではないおよしがそんな事を持ちかけられるのは初めてであった。

若者は本当のおよしの姿を知り、誘ってくれたのだ。

そして、次の晩、およしは美女の姿となり、若者と会った。

若者は苦笑しながら、「もとの姿でも構わないんだが」と言って笑った。

楽しかった。

およしも若者もその晩を存分に楽しんだ。まるで、昔からお互いのことを知っていたかのように。

およしと若者が愛しあうのもそれほど長い時間は必要なかった。
毎晩のように邂逅を重ね、他愛もない話をし、心のなかで愛を交わした。
結婚の誓いをするのも当然の成り行きと言えた。
だが、およしはここに来て自分の正体を思い出した。
およしは人間ではない。
尾がある。
若者の喜びと反比例するように、およしは次第に憔悴していき、疲れ果てたような顔つきへと変わっていった。
所詮は畜生の身、人間と結ばれることなどありえない。たとえ、結ばれたとしても、夫となる若者が、畜生と結ばれた男として世間から嘲笑を受けるのはなんともいたたまれない。
結婚の前夜、およしは死んだ。
池のそば、若者と出会い、かんざしを受け取った池の畔であったという。

これが松原の狐たちの話である。
古来より日本では狐たちと密接な関係にあった。
狐に化かされた、狐の嫁入り。
狐は昔の日本人にとって、身近な存在であった。
だが、現在ではたぬきは見かけても、狐は見かけない。
彼らはどこへ行ったのであろう。
日本人の幻想を連れ去って、彼らはどこへ去っていったのであろう。

参考

松原の狐たち-Wikipedia

<http://ja.wikipedia.org/wiki/松原の狐たち>

松原市

一里塚の耕助狐話-2

<http://www.city.matsubara.osaka.jp/10,21056,53,267.html>

松原の狐達と三ツ池のおよし狐

<http://www.city.matsubara.osaka.jp/10,977,53,267.html>

トカゲの尻尾

志菜

「今までの時間を返してとは言わないけど、これからの時間はあんたにはやらないわ」

そうあいつに言い捨てて一週間が経った。

分かった。あいつがどんなにいい加減で、だらしがなくて、嘘つきだってことは。

「付き合うことで、互いにプラスになるような関係になりたいって言ってたじゃない」

「男前でなくても金持ちでなくてもいいから、価値観が一緒の人というのが一番、じゃなかったの？」

昔からの知る友人たちは、あたしが愚痴や泣き言を言うたびに口を揃えて言っていた。

あんな人だけど、いいところもあるのよ。あの人のいいところは、あたしにしか分らないのがいいのよ。

相談したくせに、結局そんなぬるいことを言い返してあたしだけど、強がれば強がるほどみじめになっていく自分に気がつき、思い切ることにした。

プライドの方向が間違っていたことに気付いたと言っていいかも。

朝、目が覚めるたび「もうあいつとは別れたんだ」と思う生活にも、慣れてきた。

同時に、何をしても楽しくない自分に気付いた。

買い物に行っても。化粧をしても。美味しいものを食べても。旅行に行こうと思いついても。自由になった時間を勉強や資格取得に当てようと思いついても。映画を見ても。散歩に出ても。友人と会っても。

人生は所詮暇つぶし。

そんな言葉が頭に浮かんで、力が抜けてしまう。

暇つぶしでもいいと思う。楽しければ。やりがいがあれば。

そう思うそばから、にが笑いが浮かんできて、歩き続けるのもつらくて――

いっそあたしは走り出した。

あいつの住む駅の匂いも、途中の看板の色褪せ具合も、駆け上がる階段の音も泣き出したくらいに懐かしくて。

たった一週間なのに。

たった一週間だから、今ならまだ間に合う？

ドアを開けると、薄い布団の掛かったこたつの中で、あいつはヘッドフォンをしながら雑誌を見ていたけれど、あたしの姿を見て顔を向けた。

その顔は無表情で、あたしは一瞬、怖くなった。

今さら、何だよ。そういわれてもおかしくないのが分かっているから。

でもあいつは、にやっと笑った。

「人を蜥蜴の尻尾みたいに切るなよな」

あきれたような、拗ねたような口調がおかしくて、あたしも笑った。

「尻尾切っちゃったから、舵もうまく取れなかったし、バランスも悪くなっちゃってたわ」

さんま めぐる

私が「おかえり」と返すより先に、愛犬が尻尾をブンブン振り回して駆けていった。
薄いものに変えたコートにぴよんぴよんと飛びついて、飼い主の帰宅を喜んでいる。

「早かったね」

「急いだからね。なんとか片付いたよ」

よっこいしょ、と年に似合わない眩きを笑われて台所に立つ。

まさか本当に早く帰ってきてくれるなんて思わなかった。

広告も見ずに買い物を始めたスーパーで、二人とも大好きなサンマがとても安く売っていたのだ。

残りわずかのパックを手に入れてレジを済ませた後、メールを入れた。

買い物から帰った後もしばらく返信がなかったので、サンマをどう料理するかしばらく悩んだ。

ウケのよかったのは確か煮物。ショウガがいいねと胸いっぱい息を吸ってから口にしたらあの笑顔はよく覚えている。

その後も私があじをしめて、他の材料でも煮物を作り続けていく内に「そろそろ煮物はいいよ」と苦笑いをされてしまった。お互いサンマの肝を食べてしまったかのような空気だった。

無難にいくなら、塩焼き。

確かに旬である秋に食べるのが一番だけれど、時々季節はずれに見かけて焼くのもいいものだ。

だいたい同じ形なのに、大きさも様々だし、食べる順番もいつも違っている気がする。

私は実のつまったお腹や背中から食べるけれど、誰しもがそうじゃないんだと勝手に納得したのもあの時だ。

いっその事、マリネなんかどうだろうか。

旬でもないのにマリネなんて出来るのだろうか。

味噌汁を火にかけて温めながら、念の為にきいてみた。

「先にお風呂にする？」

「どうしようかなー。どっちがいい？」

そこはメールもしたし早く帰ってきたのだから、即答して欲しかったのだけど。
食事の前という条件を抜けば、飼い主と飼い犬の微笑ましいじゃれ合いだ。

買い物の後にワンコの散歩に行った。

「散歩に行こうか」と問いかけると、言葉を覚えているみたいにフワフワと尻尾をゆらす。

飼い主には届かなくても、それなりに私のことも認めてくれているみたいだった。

リードの先を気にしつつも、頭の中にはサンマが浮かぶ。

副菜も考えなければならないのに。

見覚えのあるどこかの家の散歩に鉢合わせて、一目散にと急ぐワンコに慌ててリードを引いた。

どうなったかは覚えてないけれど、相手に怪我をさせるかもしれないのが怖くて、距離を置いてしまう。

家の中でワンコを怒らせてしまって、初めて甘噛みではないその牙を受けてからは、小型犬とはいえ油断はできないのだと覚えたのだ。

「先にご飯にするよ」

「待ってました。お腹ペコペコだよー。ねえ」

同意を求めても飼い主につきっきり。一瞬は目を合わせてくれたけれど、ぷいと背を向けられてしまった。
足元に控えた愛犬のドッグフードも満たして、さぁ夕食が始まる。

「おまえも食べる？」

「危ないんじゃないかな……」

そんなことも知らずに、サンマの尻尾を見つめてワンコが尻尾を振っていた。

投稿時刻 : 2013.03.16 23:37

最終更新 : 2013.03.16 23:38

獲得☆ 3.176

《しっぽが多いで賞》

オザキ

鳥居三三

捜査対象を追って既に3年。対象の一人「オザキ」は、一見なんの特筆もすることもない中年男性である。平成の世の浮かれにもとらわれず中堅の商社に勤め、特にどこに追い越されるでもなく、かといって業界トップに踊る活躍をするわけでもなく。ただ、業界内では一定の存在感を醸し出し「某中堅商社にお勤めのオザキ氏」という姿を形作っている。年は50になるかどうか、今時ではめずらしいほどのポマードぺったりの髪型で、近づけば本当に昭和の残り香が漂う紳士。

「で、このオザキ氏が、怪盗赤フン男っていう、そっちの情報のほうが、ネタだと今でも思ってるんでスけどね」

不正経理とか談合とかなら話はわかりやすいし、納得もできる。しかし「オザキ」の容疑は「怪盗赤フン男」であり、毎回珍妙な事件を引き起こすことによるものだ、と上司は言う。

怪盗赤フン男の犯罪履歴は、「高度」なくせに「微妙」という類のもので、例えばグレーな金利で商工ローンを売っていたA社の役員から1円ずつ、毎月口座から引き落とすとか、クーポンで騒がせたB社のクーポンが、使う時は1%お得になり、クーポン提供者にも1%多く振り込まれ、結果搾取するはずのB社だけ大損、という、どうやればそれをできるのか説明するのが難しい割に、全体の被害額が微妙な金額、という案件がざっと20件ほど続く。そして毎月記録更新中だ。そしていつも犯行現場、ともいえるか微妙なところに赤い越中褌を落としていく、といった具合であり、

「って、容疑を話しているほうが、いつも馬鹿らしくなってくるんスよ」

「とはいってもなあ、被害にあってる会社も会社でまあ、よくガンガン言ってくるほうでなあ」

面倒くさそうに我が上司は頭を掻いて、隣の席に座っている。少し古めの覆面パトカーに男二人。なんとか警察24時でご存知の風景は本日、この場所でも展開している。

まあとどのつまりは、やっかいものをどうにかしてくれ、と暗にその被害者達に相当突っつかれているらしい。例えブラック代表と言われるような企業であっても、被害に合っていれば当然被害者であり、それを守るのは公僕たる我々の…

「その先は言うなあ、タバコがまずくなる」

「地の文読むのやめてくれますか。あと、タバコやめるって先月いってませんでしたっけ？」

「口に出していっているものが地の文なわけがないだろう、このメタ野郎め。ああ、いつだってやめたさ。そして何度でも再開する。その繰り返しだあ」

ニコチンという魔性の女は、今も上司を魅了し続けているらしい。

とはいっても、毎日観察していると、「オザキ」も変な行動をすることがわかった。毎月9日になると、朝方とあるビルのポストにこそこそと近づいて、なにかを投函する、らしい。ところがその後そのビルのポストの主、であるところの会社の人間と立ち会いの元、そのポストを開けてみても、なにもないのだ。念のためその会社と「オザキ」との関係を確認したが、全く接点がない。

「試されてるんでスカね」

「まあな。『わかっているぞ』っていうサインかもしれないが、赤フンのやることはよくわからん」

どこまでも投げやりな返事が、勤労意識をがりがりと削っていく。

「いつまでこんなこと続けるんでスカね」

「まあなあ、こういうのは、大抵その状態に慣れたなんて思っている頃に、突然終わりが来るって相場が決まってるんだあ。それまでは、じいーっと待つさあ。」といってあくびを噛み殺す。どこまでもだらしがない。

しばらくして、

「で、お前えさんは、まだその終わりに気がついてねえんだな」

と幾分鋭い声が聞こえた。

「えっ？」

「見ろ、ワイパーのところ。　　ったくどうやってひっかけたんだか。こちとらずっと車の中に居たっていうのに」

見るとワイパーの根本に、赤い布切れが纏わりついている。この状況からして、オシャレなスカーフではなさそうだ。外に出て改めて確認すると、ご丁寧に赤い越中褌。そして傍らに名刺が挟み込んである。ご丁寧にふりがながふってあり「オサキ」と書いてあった。

さて、いままでの調べで名前の読み方が違うといった基本的なミスはしていなかったはずだ。それともそれはフェイクなのか。

「まあ、そのまま額面通り受け取ると、怪我あするなあ、こりゃ。オサキ真っ暗、なんて言いてえところだが、どうやらまだヤツ、もしくは奴らの尻尾は、別に8つはありそうだってことだ、くだらねえ。」

いまいちガテンが行かずそのココロエを聞くと、

「尾を裂く、と書いて尾裂（おさき）。九重の狐とか、んーあれか、あんまりそういうのはわからんか？　相手はくだらねえ洒落者で珍妙だからなあ、こっちも少しばかりノってやらんと、なかなか現場にも辿りつかねえぞ」

そうやって短くなったタバコを咥えた上司は、げしげしと楽しそうに笑って、件の褌を手にとって眺めていた。上司のハンチング帽の被りが、今までに比べてずっと浅くなっていることに気がついたのは、結構後になってからだった。

といかけ

さきは

「けいこうとなれどぎゅうごとなることなかれ」

そんなことを、どこかの誰かが言ったという。

「その論理で言えば、だ」

買い物かごをさげて俺の前に立つ友人が、ぼんやりと、何も無い空間を見つめた。やがて、友人の目は焦点を結び、ゆっくりと視線

をおろす。そして、正面から俺を見据えてきた。

「しっぽのない牛の後を歩くことは可能か」

「可能だろ。それより、その問いを設定する意味がわからん」

「では、そもそもしっぽとは何か」

「もふっとするためのものだろ」

「いや。しっぽとは、バランスをとるためのものだ」

ものすごく真剣な顔がこちらに向けられていた。友人は続ける。

「均衡を保てぬものの後を歩くことはできない。なぜなら、まともに歩めずにこけるからな」

まともに聞いているのも馬鹿らしくなったので、俺問いを投げてみた。

「じゃあ、しっぽのない牛がいたら、おまえはどうするんだ？」

「盛大な焼肉パーティーを開催しておいしくいただく。それはもうありがたく」

「おまえ、呼ぶほど知り合いいないだろ」

「では、逆に聞くが。尾のない鶏の前を歩くことは可能か」

「その問いに、何か意味が？」

「しっぽがなくとも、とりあえず、その牛は道をつくってくれている。歩みにくいかもしれないが。ふらふらした鶏の前を歩くよりは、足取りのおぼつかない鶏を気に掛けながら進むよりは、歩きやすいのかもしれないな。ならば、ふらふらしたものであっても、前にいないよりはましか？ その牛にしっぽがあれば大歓迎？」

俺は顔をしかめた。

「おまえ、性格わるいな」

友人は口の端をもちあげた。

「心に刺さるのであれば事実なのだろうよ。認めたらどうだ、誰かにくっついていく方が向いている、と」
「認めるさ。だがな！」

俺は声をあらげ、手にしたローズの香りと書いてあるビニールパックを友人につきつけた。

「どうして俺がお買い得柔軟剤現在増量中高級感あふるるフローラルな薔薇の香りを手に主婦に混ざってレジの長蛇の列に並ばねばならんのだ！」

「追従するのが好きなのだろう？」

「はなしをすりかえるな」

「すべては俺がひとりぐらしだからだ。対しておまえは実家暮らしだ。俺の生活費を浮かせる手伝いをしろと、ここに来るまで何度も言ったじゃないか。大学生が単位とりつつバイトで生きていくのは大変なんだぞ。そこのところは了承済みじゃなかったのか？」

「知るか」

「人助けだ」

「どこが」

「とりあえず崇めてやる」

「拝むな恥ずかしい！」

くっつかかってみるも、友人は至極冷静だった。

そこに、おそろおそろといった調子の声が、かけられた。

「あの一」

俺と友人の目が、同時に、声の主に移る。

周囲の奥様方の視線を集めていた俺達に、スーパーのレジの店員さんが、お会計の順番が回ってきたことを告げた。

投稿時刻 : 2013.03.16 23:43

最終更新 : 2013.03.17 17:48

獲得☆ 3.000

《時事テーマ賞》
TPP（当然ペニスぼろり）
工藤伸一@ワサラー団

日本が参加することに対して賛否両論の「TPP」とは「当然ペニスぼろり」の略語だという。すなわち TPP 参加の条件として「聖域」の問題があり、たとえばそれは食糧自給率が下がると国際関係に何かあった際、兵糧攻めになってしまっただけで困ることから、日本の農業を守らなくてはならないということである。

「聖域」は他にも様々な分野に存在しているが、特に厳しいのはアダルトビデオのモザイクだ。「洋ピン」と呼ばれたりもするアメリカの AV は無修正が基本なので、もしそれが堂々と日本で販売されることになったら、既存の AV メーカーの被る損失は甚大である。

技術大国とされる日本が世界に誇る製品は多々あれど、たとえばパソコンやスマートフォンについては、DELL や HP に Apple などといったアメリカの巨大メーカーに打ち勝つことは難しく、日本製のパソコンやスマートフォンにしても OS はマイクロソフト社の Windows やグーグル社の Android が採用されるため、どうしても日本独自の製品が世界を席巻するようにはならない。

しかし日本の自動車メーカーは今もその安全性などから世界各国で人気を博しており、カーセックスを行うに際して安全日を気にする必要がないから、前述のアダルト業界においても重要な産業である。

なおかつ日本のアニメやマンガにゲームといったコンテンツもジャパニメーションと呼ばれ世界中で称賛されている。そのうえ「変態」という日本語が「HENTAI」として海外でも通用するクオリティの高さによって、日本のアダルト産業はジャパニメーションとも深く結びつき一目置かれる存在となっている。

とはいえそれらアダルト系コンテンツを無修正のまま日本国内で流通させるには憲法の修正が必須なため、多くの政治家や識者が侃々諤々の議論を繰り広げてきたことに関しては今さら説明するまでもない。そこで現与党は「2% のモザイク緩和」をターゲットとする政策を打ち出すことにより、株価や円安に良い刺激となったことから景気は回復の兆しを見せている。

けれどもそれはモザイクを必要としない海外のアダルトサイトに太刀打ちできるようなものではないこ

とから、アダルト系コンテンツによって性欲を発散しなければモチベーションを保持できない労働者階級への不満を募らせるばかりで、単なるモザイクの緩和ではなく新しいセックスシンボルの導入が待望されることとなった。

憲法によって永久に戦争を放棄するよう規定されてしまった今の日本において、アメリカのように自己防衛のため拳銃を所持することが出来ないように、無修正の陰部を晒すことは国家の平安を乱す懸念がある。

そこで乳首や肛門のように性器に準じるパーツのみ解禁される方式によって、美しい国・日本を取り戻す強い意志が支持されて衆院選は現与党の圧勝という結果を得たわけだが、そこに「TPP = 当然ペニスぼろり」への参加が表明されたことによって「売国」の烙印を押されそうな世論の反発を受け、次の参院選はまたしてもネジレ国会に繋がるかもしれないとの論調が高まってきた。

その不安を取り除く名案として注目を浴びているのが「チンポをシッポに置き換える肉体改造論」である。これは本来のオチンチンを尻尾に見せかけるなどといった付け焼刃の特撮技術などではなく、男根それ自体を切除して尻尾に換えてしまう大胆な発想だ。

それによって海外では性器と目されることのない尻尾が日本独自のセックスシンボルとして新たなイノベーションを促し、美しい尻尾を獣のように自在に操る『ドラゴンボール』の孫悟空のイメージとも相まって、ジャパニメーション及びアダルト産業の破壊的なグローバルゼーションを齎すこととなる。

男のイチモツは尻尾化によってモザイクを必要としなくなるが、次に必要なのは女性器である。こちらでも他の動物がそうであるようにクリトリスを尻尾にしてしまえば、男女の営みは尻尾同士を絡め合うものとなり、それによってゲイやレズビアンあるいはクィアと呼ばれたりするセクシュアルマイノリティにおいても、全く同じ方式の「交尾」として行われるようになることから、性をめぐる様々な制約から解き放たれることが予想される。

この未来的とも言える「尻尾補完計画」が今すぐ実現可能となった背景には、我が国の同胞がノーベル医学・生理学賞に輝いた「iPS細胞」を用いる再生医療の応用によるものであり、そういった経緯を鑑みるに、将来的には海外のアダルト産業においてもモザイクを必要としない「尻尾による交尾」がグローバルスタンダードとして広まるだろうことは断固として間違いない客観的事実である。

なお国民の代表者たる我ら与党の国会議員は既にその全員が尻尾化を施されており、その機能的かつ甘美なイニシエーションによって、かつてない極上のオルガスムスが得られることを、腰が抜けるほど何度もやりまくって確認済みである。（了）

投稿時刻 : 2013.03.16 23:30

最終更新 : 2013.03.16 23:48

獲得☆ 3.000

真実と動機

ウツミ

逃げて、逃げて、わたしには逃げ場所などどこにも無かった。

『……なお、警察は殺人事件と見て調査を進めており、重要参考人として、現在行方が分からなくなっている……』

街頭に置かれたテレビから、ニュースキャスターの声が響く。

——……まだ。

思わず唇をぎゅっと噛みしめる。

——やっぱりここも駄目だった。

テレビの音声を振り切るように歩み去るわたしの耳に、今度は周囲の人の話し声が届く。

「やだ、この街で殺人事件ですって！」

「おいおい……。人殺しがこの街にいたりとか、勘弁してくれよ……」

「人殺しなんか、とっとと死刑にしちまえばいいんだよ！」

「そうそう！ 刑が軽いから人殺そうって言う連中が後を絶たないんだよ！」

——うるさい。うるさい！

人気のない通りを早足に進みながら、わたしはギュッと手を握り締めた。

——あなたたちに何が分かるっていうの！？ ただニュースを聞いただけの連中に！

悔しかった。

少し前までは、わたしだって彼らと同じだったはずなのに。

殺人は重い罪。それを犯した者は厳しく罰せられるべき。

そう、考えていたはずなのに。

——どうして、こんなことに……。

わたしは過去を振り返る。

その時まで、わたしは何も悪いことなどしていない筈だった。

それとも、騙されたことは悪なのだろうか？

最悪の相手に出会ってしまった事は、責められるべきなんだろうか？

分からない。ただ、分かっている事は一つだけ。

アイツは、最低のクズだった。

ほんの一欠片の悪意で誰かを破滅に追いやることを生業としていた、クズ中のクズだった。
アイツに目を付けられたわたしに残されていた道は――破滅だけだった。
それでもわたしは奴の不正を警察に訴えるべく、証拠を掴もうとした。
だがしかし、奴にとって生業だったからこそ、都合の悪い証拠は徹底的に隠されていた。
だから、それ以外に方法は無かったのだ。
――アイツが活着ている限り、わたしは幸せにはなれない……。
だから、殺したのだ。
徹底的に。
容赦なく。
これで、幸せになれると信じて。
……だがしかし。

わたしは人目を避けて裏路地を歩いていた。
電灯さえまばらな、薄暗い通り。
今、マスコミの報道はアイツが善良な市民であったかのように報じられていた。
――どうして……。
結局、警察やマスコミも未だに奴の不正の尻尾すら掴めてはいないのだ。
それだけ奴が狡猾だった、とも言えるだろう。
無論、もうしばらくすれば警察もアイツがどんな人間だったか気付くはずだ。
だが……。

「なあ、この街で起こった例の殺人事件、まだ犯人捕まってないらしいぞ」
「警察は何してんだよ……」
「あの重要参考人が殺したんだろ？とっとと捕まってくれないかねえ……」

悪意なき野次馬たちは、警察がアイツの不正の証拠を掴めていないことではなく、未だにわたしを捕まえていないことを責める。

――ねえ、どうして……？どうしてわたしが追われなくちゃいけないの……？

無力感が胸に満ちる。

一体、誰が悪いのだろうか？

アイツなのか？それともアイツを殺したわたしなのだろうか？

真実を掴みきれない警察やマスコミ？あるいは無根拠な噂で人を貶める野次馬たち？

本当のところは分からない。

だけど、これだけは言える。

――誰も、わたしを助けてはくれなかった……。

その思いが胸に溢れ、嗚咽となって口から洩れる。

――結局、こうなるまで誰も助けてはくれなかった……。なのに、わたしが責められるの……？
どうして。

わたしはただ……。

――幸せでいたかっただけなのに……。

その時、わたしの背後で足音が響いた。

「ちょっと、そこの君！」

振り返ると、警官が二人、道を塞ぐように立っていた。

——ああ……。これでもう、逃げられない。

その時わたしの胸に宿ったのは、諦めだったのか、安らぎだったのか。

彼女の揺れるしっぽ

ぱびこ

ただ泣きたいときがある。
ただ寄り添いたいときがある。
ただひとりになりたいときがある。
そんな時に限って、うまくいかないのが世の常。

「髪切ったんだ」

開口一番、目の前のポニーテールは言った。
今日はキャミソールにふわふわのワンピースを着ている。
うしろの尻尾をふりふりと、彼女が振り向く度にシャンプーの香りが撒き散らかされる。

かかとの高いミュールなぞ履いてよくバランスがとれるなあときらきら輝く足元を見ながら思った。

「うん。夏だしね」

耳より少し下に切り揃えられた毛先を左手で軽く持ち上げながら、不器用な笑顔で答える。
まつげバサバサでアイラインのびしっと入った彼女の顔を直視するには、いつも少し勇気がいるのだ。
まるでお人形のような整った顔立ちは同性でも見惚れてしまう魅力がある。
と同時に、自分の自信のなさを毎度再確認してしまう。

「ますます幼くなったなあ。この童顔め」

「この、気にしてるんだぞ」

「可愛いねって誉め言葉だよ」

横に並ぶとまるで姉妹。
ヒールの効果でさらに背の高くなった彼女と並ぶと、とても同級生には見えない。
童顔でチビのわたし。おとなっぽくてモデルばりの彼女。

わたしが髪を切った理由を、彼女は特に聞かなかった。
本当に夏だからという言い分で受け流してくれたんだろうか。
こんな不釣り合いなわたしを友達だと言ってくれる彼女のすきなところは、この距離感だった。

「暑いね。スタバ行く？」

「行く行く。今ならグランデでもすぐ飲みきれそう」

わたしは置いて行かれないように彼女のちょっとだけ後ろを歩く。

決して前には行かない。

彼女は笑いながら颯爽と風を味方につけていた。

ああ、なんてかっこいいひとなんだろう。

投稿時刻 : 2013.03.16 23:56

最終更新 : 2013.03.17 00:03

獲得☆ 3.600

※制限時間後に投稿

のらりくらり

志乃の詩

「ただいま戻りました」

部屋に入ると、六畳一間は春の陽気に満たされていた。カーテンを開けて出かけてしまっていたため、昼間のぬくぬくとしたけだるさがそのまま閉じ込められている。畳が日に焼けてしまいそうだった。

「おう、遅かったな」

そんな空気のせいかな、我が同居人の反応も少し遅かった。昼寝していたのかもしれない。

「すみません、タマさん」

靴を脱いで玄関にそろえたところで、同居人が姿をのこのこと歩いてきた。本来聞こえないはずの肉球の足音まで聞こえそうな歩調である。それに合わせて真っ白なしっぽがゆらゆらと揺れる。

「土産はあるんだろうな」

「ありますよ。サークルの友人が余った鰹節を譲ってくれました」

「この前のサバがうまかったんだが」

「贅沢言わないで下さいよ」

目の前に鰹節を開けると、タマさんはしぶしぶ、あくまでしぶしぶと言ったていでもぐもぐやりはじめた。どうやらお気に召したようである。

「タマさんって本当に猫みたいですよね。地縛霊のくせに」

「地縛霊って。土地神だって言ってるだろう」

「まあ猫なら話したりしませんからね」

「ちゃんと否定しろよ」

文句を言いつつちゃんとカリカリやっているあたり、律儀な神様である。もっとも、勝手に部屋に住みついて食べ物を奪われていることには変わらないので、地縛霊よりも迷惑ではあるが。

タマさんが口を動かすたびに、しっぽが揺れる。これは喜んでいる合図である。

「しっぽっていいですね」

「あ？」

「いや、色々表現できて便利じゃないですか」

「欲しいのか、しっぽ。その気になれば生えさせてやってもいいぞ」

「え、本当ですか」

「こう、尾てい骨のあたりから、グイッと……」

「そんなダーウィンもびっくりな進化論でっちあげないでください」

仕返しにタマさんのしっぽをつかんで抗議した。ぴしっ。

「おい、離せ」

しっぽの根元に力がこもった。しかし指の握力の方が圧倒的に勝っている。

「聞ってるのか。は一なーせー」

ぐいぐいと引かれる。動かしまくっていたせいか、ふわりと花の香りがした。

「あれ、タマさん。どこか行ってたんですか」

「は？ ああ、少し河原を散歩した。すみれが咲いていたぞ」

「へえ」

ぱっ、としっぽを離してみる。花の香りは一層強くなった。勢い余ってタマさんがこけた。

「おい、いきなり離すな」

「いやあ、しっぽっていいですね」

「なんだ、やっぱり欲しいのか」

「うーん……へ、へくしょい！」

花の香りの中の何かが、私の鼻を刺激した。

「欲しいのか？」

「……やっぱいらないです」

春の昼下がり、のらりくらりと続いていく。

投稿時刻 : 2013.03.17 00:04

最終更新 : 2013.03.17 00:09

獲得☆ 3.000

※制限時間後に投稿

コグマのしっぽ

肉まん大王

「それ、 しっぽ？」

「ちんちんだよ。これはちんちん」

はだかになったコグマの体は、想像してたより華奢な印象だった。
自分にはない突起物に心の底から衝撃を受けたマグコの質問に、コグマはそう答えた。

「ちんちんって何？」

「おしっこするところ」

「私にはないよ」

「おまえ女だから」

「女って何？ コグマは女じゃないの」

「おれは男だよ」

「なにそれ。ちんちんがあると男で、無いと女？」

「…たぶんそう」

「ふうん」

もっと聞きたいことはあったのだけど、コグマはもう素っ裸で川のほうへ走ってゆく途中だった。

喉が渴いていた。あの川の水は飲めるだろうか…。

マグコの居た部屋で見た、体感するビデオテキストの川は、キラキラと冷たく、手ですくい口元に運べば命のしずくのように喉をうるおした。

ここの川は本物だった。
本物の川はテキストの川よりはるかに大きく、濁っていて、底の石は緑色をしていて、いまはコグマが浮かんでいた。

「喉かわいた」

「…」

「この水飲める？」

「飲めるけどー… だめ」

「なんで」

「いまウンコしたから」

「えっ きたない」

「ごめんだから もうちょっと上のほう行って飲んで…」

「…わかった」

川沿いは茂みになって遡れないので、砂場に戻る途中の Y 字路を曲がり、上流への道を探した。
あまり高くはないがうっそうとした木々の間から、水の匂いがする。

川の向こうは、昨日までマグコが居た場所が見える。
“オリジナル” と呼ばれる人たちが生活している場所だ。

川は中央から分断されていて、どちら側からも自由には行き来できないようになっている。
マグコはこちら側に來た理由をふかく考えてはいなかった。

なぜ來られたか、ということも。

終わりに

てきすとぼい杯、第一回、第二回と立て続けに「お題が難しい」というお声をいただいてしまいまして、第三回は、テーマ「しっぽ」のみ、という、これまでの開催三回中で最も制限の緩い、自由度の高いお題になりました。

が、そのかいありましてか、今回は全体的に、幅広いジャンル・作風の作品に恵まれたように思います。また、作者さんの普段の持ち味、個性が発揮された作品が多かったのではないかと感じましたが、いかがでしたでしょうか。

ただそのためか、いずれの作品も甲乙つけがたく、審査結果としましては、全作品が平均で☆1以下の差(☆3.7～☆2.9)に収まるという、大変な接戦となりました。

その中でも、特に楽しさや親しみやすさを持った作品に、今回は高めの評価が集まったように思います。

そして今回、初めてご参加のかたが多かったことも、運営する側としては非常に嬉しいことでありました。

最後になりますが、今回もたくさんの愉快で魅力的な作品たちを、てきすとぼい杯にお寄せいただきまして、誠に誠にありがとうございました！

次回てきすとぼい杯は、2013年4月13日(土)開催の予定であります。

お時間ございましたらまたぜひ、投稿、審査・感想にご参加くださいませ。

2013年3月28日
てきすとぼい杯 運営担当

てきすとぽい杯作品集
〈第3回〉

<http://p.booklog.jp/book/68933>

編集まとめ : てきすとぽい

<http://text-poi.net/>

てきすとぽいプロフィール

<http://p.booklog.jp/users/textpoi/profile>

表紙デザイン : 蟹川森子

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68933>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68933>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー

<http://p.booklog.jp/>

運営会社 : 株式会社ブクログ



てきすとばい杯